

# 淀鯉出世瀧徳

近松門左衛門作

頼んで。藏々に封をつけ一步の銀も使はせ  
なんだけなを。總兵衛といふ相手代若い且  
那の氣を詰めさせ。煩はせてはならぬと新  
七を追出し。氣儘にぐわんぐわと使はせる。

鯉が舞を飛んで出て日頃馴染の茨木屋の。  
吾妻をとんと請出し。明日は直に八幡へ。

今宵廓の名残ぢやと井筒屋で大振舞。なん  
ぢやは知らず井筒屋の庭から門迄長持で通

られぬ。今夜の物入りざつと積つて二百兩。  
頼も金は片行きな有る所には有るものか。

私等は夜晝足掻いて三百は儲け兼ねるに。  
よう飲んだとて一步取り。よう笑うたとて

二步取り。兩肌脱いで探られ鼻の孔へ胡椒  
入れて。噫しても一角。地いかな鯉でも

耐でも。コレ一藏あかうと語りける。地新七  
扱はと恨めしく。腹の立つにも主思ひ。ム

ムそれは聞及うだ分限者すんど若い人ぢや  
けな。仰山な酒飲みと聞いたが。今宵も酒

であらうの。ア、ア、並びもない飲抜け  
親茂庵というたも命を酒に代へられた。鯉

廓住居は。時雨の雨よ。降つつふられつ。

むらくさめの。まだひぬ露もまだひぬや  
よや。ア、霧は不断の。伽羅を焼き。晝に

もまさる燈火は。月常住の。フシ夜見世か  
や。朱雀三谷もいかなこと。直下にみつの

難波の里オクリ戀も。所の氣につれて萬手び  
ろき大廓。色に擲つ金銀は。土か砂場の西

口や思ひ綻ぶ袖口を。九軒阿波座の野良鳥  
月夜はなほか闇の夜も。瓢箪町を腰づけに

威權ふる手の印籠の。底に焼きながら吸ひが  
らの煙に油煙棚引きて。霞が關か東口こ

こぞ浮世の伊達の大木戸。明けぬは銀の富  
樫の關。それつらく。惟れば。大盡客衆の

秋の月は。小判の雲に光り。小傳呼びまし  
や長返事。驚かすべきフシ夜半もなし。地三

番太鼓つてんてん。天下は夜中八つ過。廓

は戀の晝中や。フシ籠やろばかりぞ寝聲な

り。地頃しも初冬立猪餅小豆織のべんがら  
縞。羽織の上に手拭帯頭巾鼻まで顔隠し。

女郎買ふべき風にもあらず宛然用なき體に  
もあらず。どちらへどうとも片付けて思案

に落ちぬ風俗。新町橋の橋の上橋辨慶が殖  
刀の。鞘拾うたる如くにてうろくとして

立つたりしが。ちよこくと立寄つて。詞  
これ籠籠の衆卒爾ながら物問ひませう。今

宵九軒の井筒屋の。客はどこ衆の何とした  
人。まだこゝに遊んでかどうで御座ると尋

ねける。ア、されば井筒屋のお客は。隠れ  
もない八幡の住人江戸屋の勝二郎殿。替名

は鯉様十萬兩使うても。此方人が百錢落い  
たとも思はぬ程の身代なれども。地新七と

やらいふ手代頑固に政道し。一門衆町所迄

殿の母御前ハハノミちもと此處に勤めた人。地ちどち  
らへ似ても蛇の子孫。それでもよい衆のし  
るしには萬事に達した器用人。能の脇師わきしを  
手活てにして九軒で主の座敷能。常任酒で足  
ひよろつき三番叟も高砂も。皆狸々の亂みだか  
と思ひますとぞ笑ひける。地ち女房お半も手  
分てをして。見外みはずすまいの目もきよろしく立  
賣堀邊たてうりさまよひ來て。夫を小蔭へ咳拂せきばきひ招  
き寄すれば新七合點あたらしく。そつと寄れば耳を寄  
せ。同どうなう今迄西口につけて居ましたが。  
こゝへはまだ見えぬかと叫べば。ム、よ  
い／＼様子は知れたぞ。まだ井筒屋に居ら  
るゝけな。地ち程はあるまい抜かりやんな人  
が見れば不審が立つと。一つ所に立ちもせ  
ず橋を越えたり渡つたり。忍び佇む女夫の  
姿夜見世戻りが氣をつけて。同どうヤアこつて  
りと味な事地ち妓女狂きやうひよりあの方の實入みいりが  
よからうといふもあり。時分がら心中の下  
地ちか又義太夫が口の端はに。新町橋を鵲つばきの。  
橋と語りて行く人もオクリ絶えて、其の夜も

フシ更けにけり。地ちなうあれを見や中から提  
燈引舟交てんしんくら。禿が諺ことわざうて客送るそりや是  
に極つた。其方または駕籠かごに取付きやこつちへ  
任せて置かしやんせと。大門際に待ちかく  
れば。同どう遣手の綱ぢや。羅生門開けてたも  
といふ地ち茨木屋の大盡。鯉にはあらで雑魚  
場の人。鈴木様明日駕籠の衆頼む合點と。  
北へ走れば新七夫婦。南無三枚肩見送りて  
フシ口を。開いてぞ呆れたり。地ちそれ／＼そ  
こへ又提燈。今度はよもやはまるまいと潜  
くゝるを手ぐすね引き。女房しかと引つ捕  
へ見れば色は眞黒に。横肥よこえつたるみつちや  
面。道頓堀の佐渡島傳八はつと白けて立退  
けば。傳八も肝潰し是は君何したまふ。同どう  
人違へとは存ずれども色に袖を引かれて。  
神ぞ忝かたじけなくう思ほゆるホ、／＼。賤しんも昔は  
戀を研ひき年中廊に入りびたり。太夫天神に  
引きずり引張られ。それで顔が引きつつか  
西瓜すいかのやうな顔なれど色は黒さね。地ちずん  
ど風味のよい男。しんぞ一切振舞ひらひ度い。

ホ、／＼。オクリ笑ひて、南へ歸りけり  
フシ暫くあつて。地ち井筒屋の能がすんだと出  
入いりの者。兵法遣へいほうひ座頭茶の湯者古道具屋。  
大酒食たいしゆく悦えきおかけを蒙る八十末社。流石の廓  
駕籠かごきれて雪踏ゆきふみ片足かたしの酔ひつづれ。遙の跡  
よりのさ／＼と彼奴やつは手代の總兵衛め。同  
道は佞人組べいじんぐみ能の師匠の富川め。京の浪人軍  
四郎。醫者はすれども本道守ほんだうらぬ目醫師めいしな  
んど。中にも總兵衛嵩取かみとりつて。同どうなんと何  
れも旦那のはを御覽ごらんじたか。あれ皆我等  
がさする事。兎角此の總兵衛と肌を合せ。  
羽交はがひについて廻らつしやれ。地ち一期の身代  
固めてやらう。はて旦那の身上しんじやうで一年に。  
千兩二千兩は筒落つつおちでもある事旦那を名代なだいに  
立てばどう瞞まかめうとも自由な事。かの新七  
のいきずりめお爲顔かみかほで旦那をひつめ。家久  
しい我等を押退け。一人威勢を振はうとし  
をつたを。同どう旦那へ吹き込みまくし出して  
退けたが。聞けば大阪にうらたへて。此の  
總兵衛と公事の宮みやのとぬかさけな。地ちあは

れ出所へ出やれかし五畿内を奪いて見しよ。  
今の間に御器さけて心からの非人敵討。ど  
こそ其處らの橋の下新七は居やらぬかと。  
口合悪口僭上はり、ッシどつと笑うて通りけ  
り。新七どうも怵へられず胸を擦り鎮め  
て見ても、律義一遍に眞直に一筋な若い者。

末の事も思はれず斬つてくれうと飛んで出  
る女房抱き付き。詞これこゝな人。女夫の  
者が世話やくは勝二郎様へ御意見申す爲で  
はないか。あいつ一人斬つたとてお主の爲  
には何がなる。新七が言譯なく身のあつさ  
に斬つたと實手前の踏みかぶり。地無念を  
怵へてお爲になり親旦那様の御恩を。送る  
心は無いかいの其の様に短氣では。私や心  
許ないと恥しめ留むれば新七。詞それらも皆  
合點理が非になるとは知つたれども。今の  
悪口聞かぬか。地彼奴が此の前親旦那の悪  
性銀を。十四貫目横取して曲事に逢ふ筈を。  
とやかく俺が精力で沙汰なしに事すんだ。そ  
其の時には命の親と手を合せて拜んだ。そ

れから十年経たぬ間に少しも爲になりさう  
な。古い手代を猜み出し。恐らく清しい此  
の新七に無い難つけて暇出させ。旦那の身  
代空にして今の様な雑言。のし上つた面見  
れば火に入る事も思はれぬとスエテ涙を流す  
ぞ道理なる。地時に揚屋の上する女子下男

門番起いてちと門を頼みます。詞是はこつ  
ちの大事のお客。浮世小路迄お歸りぢや。  
きつう酔うて御座んす故。断いうて内か  
らお駕籠に召させます。地氣を通して下ん  
せといふより早く門番。皆迄いふな合點ぢ  
やと。潜開いて目を眠るも、フシ日頃の金の  
威光ぞかし。地夫婦すはやと橋詰にて。駕  
籠の跡先しつかと捉へ。お駕籠待つて下さ  
れと引留むれば駕籠の者。詞ヤアこりや狼  
藉して。息杖の背打を喰ふかと。地振上ぐる。  
狼藉は致さぬぞ旦那のお爲に致すこと。撰  
たばぶて駈かば駈け旦那へ一言申さぬうち  
は。駕籠をやらぬいや放せ。いややらぬと  
振ち合ふ勢ひ。駕籠を横に打明けて駈なが

らの勝二郎。橋板をころ／＼河へ落ち  
んとする所を。お半ちやつと引起し後を抱  
へて膝の上。一昨日からの酔醒めず女郎の  
小袖を打掛けながら。詞舌も廻らぬ夢半分。  
太夫こゝまで送つてか。エ、忝なんきんの  
八幡酒には酔はぬ。今のは兼平の能の手。

木曾殿が泥田へ踏込まれた所。ウタヒへ末し  
ら雪の薄氷。深田に馬を駆落し。引けども  
上らず打てども行かぬ望月の。駒の頭も見  
えばこそは何とやらん身の果。いや引は  
あ引。詞なんと地面白い事かと。フシひよろ  
／＼正體なかりけり。詞申し旦那様これは  
どうしたお身持ぞ。お前のお蔭で榮耀する  
今夜の人も大勢あるに。お駕籠に二人附く  
者ない。これが江戸屋の勝二郎様のお行儀  
とはいはれまい。私が男の新七にお暇を下  
され。地お出入さへ止められたれど。眞實  
お爲になる者はお家で新七ばつかり。御身  
上の妨をなす總兵衛めと新七と。思ひかへ  
て下さんすは。お馴染とも思はれぬ。詞其

の上忘れはなされまい。前方私御奉公致したうち。お寢間へ来いのお側に寝よの人頼み迄遊ばした。地私は一つも年かさなり若いお主を唆かす。熊手よ慾よと言はるるも口惜し。奥様お呼びなさるゝ時のもじやくじやも如何と。お暇を乞ひましたれば志を感じた。さりとほ女子に奇特者あの新七といふ者は。親茂庵不便をかけ我が子の如くせられて。兄同然の新七と夫婦にして。一生見捨てぬお約束。地其の新七を追出し。敵のやうになさるゝは其の時から私を。憎さに夫婦に遊ばしたか憎まるゝ覺はなけれども。お心に従はぬ恨を杵で當り杓子であたる御仕方か。但しは今にお心残り格氣ゆゑの憎しみか。それならば猶きたない氣。何が悪うて新七が御意見は御意に入らぬぞ。頼もしいないお主様やと。涙を。零さぬばかり。地けに酒の酔本性忘れずお半を突退け。因縁話おきをらう。新七めが意見聞き度うない。俺が親父はな。一年に八千兩九千兩づつ。三十年使はれたれども遂に浮名は立たなんだ。此方が身代で五百兩や千兩使うたらなんぢや。ナア慮外ながら。それを新七めが。使ひ潰すの身持が悪いのと。一門一家町年寄庄屋迄ふれ歩いて。藏々に封をつけさせて阿呆者にしてくれた。忝い事の何ぢやそちに心が残つて格氣ぢやあ。おけよ。尤初めには惚れて居た。けれども今新七めがたべよとして。裏まで反して喰ひさがいた物を此の方所望にあらぬ。ア、慮外ながら。新七めが口ゆゑに揚屋の届も無沙汰になり。若い者の一分を棄てうとした此の恨みは盡きせぬ。勘當の上の勘當ぢや。サア地駕籠やれと乗らんとするを新七飛び出で絶り付き。お情ない旦那殿。何とて左様に横しまにお聞きなさるゝぞ。新七が御一分を棄てたとは怨めしい。棄てまい爲の御意見金の事は申さぬ。千兩が萬兩でも金ほどづつの御身につく。エテお慰みがあるにこそ。地總兵衛めが計らひにて好曲どもを替間に附け。十兩の物いりをして百兩に附け立て。九十兩は分け取りにして白痴にして笑ひまするが。此方は御存じござらぬか。吾妻殿の身請の金も。私お家にある時分七百兩と申す金總兵衛に渡した。其の上に此の度名物のお家の道具。京三界質に置き。二千兩餘の御借金が出来たけな。地旦那には借金させ手代の總兵衛屋敷を求め。お出入の醫者浪人田地買うたり銀貸して。分限になるが御存じないな。御惡の醫者はあれど善惡を嗅ぐ鼻がきかぬ鼻缺け醫者が。入れ残しの目薬でもお目が明かぬか情なや。此の新七めが親は大和の貧乏人。幼少の時藤田小平次と申した。狂言役者へ奉公やら養子やらに參つて。女形を致したを親旦那のお蔭で。お家へ參り手代並になされしが。地流石育ちが恥かしい算用算勘存ぜねば。何を奉公御恩を送らう。フシやうはない。律義を我が身の奉公にしてお爲にならうと存する一念。五臟六腑に浸み込ん

でお主を大事に存じまする。茂庵様の御臨終勝が事を頼むぞ。お氣遣なされなと。

請合うたかひもなく。斯様にお身を持ち崩させ。佛へ言譯何とせう。お墓所へ参つても顔ふりて戒名を。ろくに拜みも致されず。涙に沈み居まするわいのそれさへある

に此の盆から。お前からの言ひ付けか總兵衛めが私が。若旦那の勘當の者お旦那の墓へは参らすなど。お寺へきつと言ひ付け。

地挿いた花も取棄て手向の水迄打明けて。未來にまします旦那にさへ疎ませうといふ事か。お爲を思ふ新七が左程お氣に入らぬ

は。水と火との相性が餘りといへば曲がない。さうではない若旦那とスエテ主の意見に恨み泣き。詞を過し推参いふ。フシ涙は。主の薬ぞや。勝二郎大酒の上なほくゝ氣に

やさはりけん。ヤア意見いふも所がある。途中に駕籠より引きずり下し。恥かゝせて意見せよと説ちや人の遺言か。サア此の

慮外の言譯があるか聞かうと怒らるゝ。こ

れ申し勝二郎様密に御意見申さうも。門詰も踏まれず取次申す者はなし。よしお屋敷へ伺候し六尺どもが手にかゝり。撲ち殺されうば殺されう。主従の冥加は忘れまい。朔日と廿八日には御門に禮して罷歸り。さもなき時にも月の中に二度三度臺所の口迄参り。つてさへあらば内證から申し上げんと存すれども。さりと人はつれない者

古への傍輩も見ぬ顔し。目をかけて引廻した丁稚小者飯炊迄。言葉をかける奴等もな

く馴染とてかはいや。白犬が見知つて尾を振つてしなだれる。犬に劣つた畜生ども恨むまいとは存すれども。凡夫心のあさまし

さ無念でならぬ女房ども。エ、口惜しい新七殿但し我々僻事ならば。親旦那の魂魄冥土から蹴殺いて下されかすと。夫婦は橋に平伏して。フシ聲を。ばかりに歎きしは不便。なりける心なり。地酔ひ醒めの氣は上るぐつとせいて勝二郎。ヲ、親父迄もない事身

が蹴殺いて見せんすと。飛びかゝつて引伏

せ。胴骨を散々に踏付くる。女房はお情なしと取付けば其の儘置け。手向ひすな

お腹の癒る程踏ませませ。ヲ、踏まいで置かうか重ねて斯様な慮外をせば。下々に撲ち殺さする用心せよ。地駕籠もて来いと打乗るも腹立ち粉れ譯もなく。後向くやら前

向くやら縦に乘るやら横堀を。急げゝと走らせし。フシ若氣の程ぞ笑止なる。地新七は齒嚙をなしエ、く口惜しい無念な。天逆様の事にても主に踏まれて恨はない。傍輩の言ひなし故踏まれたと思へば腸が燃え返ると。橋板叩き欄干もスエテ握り。拉ぐ

ばかりにて。フシ涙に。眼も眩みしが。よい

く合點ちや思案ありと。駈け出づるを女房縋つて。思案とはどうぞいの。短氣を出さずと待たしやんせと引留むればしやまだ

るい。最前に總兵衛め斬り損うたも女房故。短氣も短慮もいる事が思案は此の胸にある。サア其の思案が聞き度いいや是ばかりはま

まにして。放せ。思案聞かねば放さぬ。

くらはするが放さぬかと。男思ひの女房と  
主思ひの男と。誠あまりて掴み合ひ女夫評  
犬くはぬ。犬の格氣に威されて。辻の番太  
が夢くらふ博勞町をぞ。歸りける。ッシ  
請出すといふ。其の日より。地衣裳をも皆  
町風に。縫針の茨木屋より嫁入とて。智は  
八幡の石清水浴せませんと井筒屋の。亭主  
は送る傍輩の太夫天神。持たせ遣手  
の杉重に樽の銘酒を守口や。佐太の煮賣を  
見る事も廓でならぬたの點野に。紅葉焚け  
く。鍋が茶屋牧方桶葉これも亦。吾妻請出  
す山崎見ゆる。ッシそこで乗物立しにけり。  
地吾妻乗物の簾をあけ。これ太郎様。最早、  
八幡も近いけな。地豫て鯉様道迄迎ひに出  
やしやんす筈。そこをこちら先越してに  
よつと押しかけてはどうござんしよ。詞八  
幡太夫様是はずんど洒落ませう。地そんな  
らんと菅笠で供やら主やらごちやごちや  
は面白軽々飛び下りて。ア、氣が晴れたわ  
つさりと嬉しや傍で山見たも。勤の皮切り

堪へた故。うき潮うんだは身の灸十四の冬  
より今年迄。それに染みたる風俗はいかな  
家にも走り出て。お山見じと目をつける上  
から下る魚荷の戻り。歩きくの高話。  
扱々浮世は知れぬもの。江戸屋勝二郎とい  
うては石火矢でも崩れまい。長者の家と言  
うたれども咸陽宮も滅び時。地一時の間に  
いとしばやあれもいはば金ゆゑ。生中持た  
ぬ我等しき寢覺が樂ぢやといふ跡から。  
科は何ぢや知れぬが勝二郎は追放で。八幡  
は煮える俺や見て來た。百兩や五十兩はあ  
れでも取つて退かうか。なんのいの編笠さ  
へ被せぬもの。地請出された吾妻とやはら  
どうなる事ぞあつたらもの。安分でこつち  
へ貰ひ度い。何のかのと悪い沙汰。ッシ口々  
言つて通りけり。地吾妻ふつと耳に立ち太  
郎様今のはどうぞいのいやな沙汰で御座ん  
すと氣遣がれば供の下女籠の者迄色遣へ。  
辨當持もくひさけぢう咽喉につまりし餡餅  
の。ッシ案に相違の顔つきなり。地井筒屋も

氣にかかれど。氣落させじとこれく。粹の  
やうにもない。詞あれは人の法界格氣太夫  
様を見知つて。氣遣かけて面白がる猜みで  
皆いふ事。起縁直しに酒にせう毛氈敷けと  
勇んで見ても。どこやら狭間が明樽の底の  
心は澄まざりけり。あれくあそこへ泣き  
く走つて來る人は。勝二郎様のお草履取  
佐五介ではないかいのと。いふ所へ佐五介  
息もきれく。なう太夫様。詞ひよんな事が  
出來ました。地私や何と致しませうとスエテ  
泣いて言葉もなかりけり。地扱こそ噂に違  
ひはないちやつと様子を話したも。泣い  
て居てすむ事かきつと性根を付きやいのと。  
叱られて涙をとめ。詞事の起りは皆總兵衛  
め。旦那をいとしいくとぬかいたは己れ  
が慾。お金には御一門の封がついて自由に  
ならず。地結構な茶入れ掛地お家の寶黄金  
の。詞迄。京で質に置くとて。詞何とやら  
申す位高いお公卿様の姫君を。勝二郎が嫁  
に呼ぶ其の物入との言ひ立て。其の公卿様

のお袖判を贖判し。地金の取手はよみ人知

を茨木屋へ渡しませねば。我等が手形消えて下さんせ。これ手を合せて頼みます。

らず大内方より御穿鑿。科人は總兵衛一味

ませず世間にばつと知らぬ内。早うお歸りほんに〜此のよな事降り湧かうとは夢に

の同類。十人餘り。粟田口にて獄門にかゝ

なざるれば私が爲と申し。太夫様もお首尾も知らず。地伊勢兩宮へ太々神樂。愛宕清

る筈。手代の業とは言ひながら名ざす所は

よしサアお歸りといひければ。吾妻わつと水住吉様へ金燈籠。八幡様へ萬燈其の外神

勝二郎。存せぬとは言譯立たず金銀財寶山

泣出しスエテ顔をも上げず居たりしが。地無々宮々へ。鳥居立ててのなんのとて金の入

田島。京大阪方々の家屋敷迄取上げられ。

下ない言ひ分して下んす歸れなら歸れですむ。歸れば吾妻が首尾よいとはさうした

着の儘での御追放ごを前途に御座らうぞ。

吾妻ぢやないわいな。可愛い男の流浪したるの様に思はんしよ。それが悲しうござ

腹の内から今日迄荒い風にも當らぬお身。

のを聞きながら。身の首尾を思ふやうな傾んすとスエテ歎きわびたる。口説き事。フシ眞

嘘や途方があるまいと思へばいとしう存じ

城ぢやと思つて下んすは。地曲が無い情ない亡八の譯が立たぬとて。再び廓へ立歸り

ますと。語れば一度に手をうつてスエテ呆れ。

身の恥は扱置いて。勝二郎様の恥辱はこれが何と雪がれう。こなさんの請合は私が命

果てたる其の中に。吾妻一人の物思ひ。と

ある限り。微塵も難儀はかけますまい。新町ばかりが傾城町でもあらばこそ。京の島

かく私那不仕合と。フシ餘の事。いはす泣き

原奈良伏見茶屋風呂屋へも身を賣つて。見ませ。契約お違へなされても此の方からは

居たり。地井筒屋も溜息つき。お笑止と

尋ねませぬ。勿論催促仕らぬ是から互の心

も氣の毒ともいうたばかりで爲う様なし。

事には立てませう。世に落ちようがどう

太夫様は先づお歸りなされませ。殘金二百

せうが勝二郎様の女房に。なる程の吾妻ぢ

兩八幡の馬下りに請取る筈。總兵衛とつう

や自面づくに頼むからは。響も是に偽りな

くつ致し茨木屋をば私請合ひ。手形の上で

底づく。切れ離れたる詞の末それは定か

今日お供仕り。斯様の御難儀出來の所うか

有難い。胸がちつとは開けたと伏し。フシ拜

〜八幡へ參つても。地二百兩の金子誰か

ら請取り申さんやら。お笑止ながら太夫様

い再び新町の勤を通れ。勝二郎様の一分立

みてぞ泣き居たる。時に向の堤の上大勢人

の喚く音。追放人の作法とて八幡公文所の役人數多。手シでに割竹大地を叩き。勝二郎を先に立て兩手を引張り。聲をかけて追拂ふはいまぐ。しくも。三返へすまじし。憂き事知らぬ。地若子様の氣を奪はれ性根を取られ。起きつ轉んづ足立たず橋本の宿外れ。三國境のフシ板橋にこそ着きにけれ。荒けなき聲々にてサア此所よりおつ放す。京大阪従伏見堺を添へて住居は叶はず。調音くに於ては見合ひ次第討棄て。何方へも失せ居れと。地口々罵り歸りしは。硫黄が島に捨てられし。俊寛僧都もかくやらん。地往き來の人も目をあいて泣かずに通る人もなし。役人歸れば駈付けてこれ私ぢや吾妻ぢや。不慮な難儀が出来ましたさりながら大事な。命が寶袖乞非人の身となつても。二人一所に居る上は満足ではあるまいか。亡八への出入もこゝなお人の男氣故。御苦勞かけずに埒明く管様子は靜に物語る。悲む事もなんにもない結句で浮世が

面白いと。笑うて見せて力を付け涙を隠せば顔を上げ。調詳しい様子は聞かぬども。大夫が殘金埒明くとは非筒屋殿の親切。生中禮は申さぬ。エ、面目ない此の勝二郎は。下人の罰が當つた。地大賢人の新七が。意見を用ひず。フシ勘當し。身の仇となる總兵衛めにばかされ新町橋で新七を足にかけて踏んだる罰。忽ち當つて此の仕合。身の先行のする事は今生で思ひ切つたぞ。先の事は知らぬども先づは此の世の暇乞と思つて損のいかぬ事。何れもさらばと立出づる井筒屋袖を引留めて。何方へお出でなさるゝにも當分の御入用。地路銀の餘り少分ながら御懐中と差出す。手を付けちよつと頂いて志は千萬兩。金子は申し受けまい親祖父の貯を。冥加も知らず使ひ捨て金の罰が當つて。金銀に疎まれ手ぶりになつたる我なれば。此の度きつと身を戀し一錢得難しといふ事を。我が魂に思ひ知らせん貧苦の修行の稽古の爲。金銀とては貰ふまじさ

りながら。調服部煙草煙草入煙管の餘計あるならば。一本所望申し度し。地ア、お易い事。煙管のらうは細くとも。お心を太うして心中など遊ばすな。調いやるがくどい不足なうて死ぬるこそ。本の誠の心中なれ。金に詰つて心中する勝二郎でない證據。薬も少々貰ひ度い。地けに足は御尤懐中至寶の一包。薬屋は命堅い石見の掾と祝ひければ。遣手の杉が大夫様へ花色繻子の前巾着。人蔘入れてお贈仲居の初は延二折。ちよつと假寝もあるもの。と。味な所へ氣をつくと。地駕籠の衆の仲間から。三尺手拭抱帯とて進上す。調是は彼の五尺いよこの手拭と唄にうたひし手拭か。地是は又加賀菅笠締緒あらくと召しませとよ。實にも誠の志さまが土産の菅笠と。踊にをどりし笠よなう。それは東の花嫁御。是は吾妻が身請の果。フシ腰をよぢらす供もなき。紋日の夜床引換へて禿もつかぬ草蒲團。夜見世の太鼓音絶えて山崎寺の鐘の聲はや。こうくと。ナホ



ス響けども我が迎にはいつ来うぞ。お二人  
まめで仲ようて随分無事で御座船で。麴に  
参る男山八幡の弓の弦切れず。便を待つぞ  
待たるるぞさらば。くくと泣く聲ばかり。  
耳に残りて面影は雲に消えけり。

勝二郎 初木綿

歌春の夜の夢。驚かす。鶏の。其のしだり  
をの結ばほれ。解くる思ひはいつかはと。  
いはで心にかこ。ちぐさ。根引にせんと言  
ひ交す。身は捨草の捨てもせで。浮名は流  
れの淀川や。何をたよりに水鳥の。波にゆ  
らるゝ世の習ひ。疎きは人のフシ情なり。  
地廣き世界は廣けれど。京や難波の住居さ  
へ。懐きとめられし水車月の影さへくるく  
と。彼方此方に汲み分けられて。オトリ行け  
ば。丹波路戻れば大和。フシオトリ行くも  
戻るも。二人づれ。フシ女夫鳥の。とほく  
と。昨日の閨の花紅葉今朝降る霜に朽ちそ  
めて。身を木枯の森の下道。憂きしほ踏む  
もあぢきなき馴れし。故郷の草も木も。今

の名残を止め兼ね。待て／＼と鳴く葦原雀  
フシよしみ／＼の。言の葉に。ばかされ渡  
る狐川。フシあだに暮せし年月の。榮華は  
夢の盃の。酔ひざめ枕。それは若草  
身をうらみ草。なんの其方に飽いたではな  
し飽きも飽かれもせね仲の戀と命が。フシ

寶寺。昔の里の。寢覺には伽羅で暖む床の  
内。地起き別れ行く。曉の袖から袖に手を  
入れて。出口の風も寒からず。今の憂き身  
の旅寢には。シじつと寄せたる肌。と肌  
フシ吹き分けて吹く。山おろし。礎に立てる  
女郎花愴氣辛氣となまめきて。くねる心の  
男山いとし男を古への。スエテ世に引返せ弓  
八幡。神に暇と伏拜み。東を見れば名にも  
似ずウツヒ月こそ出づれ朝日山。山吹の潮  
に影見えて。歌大黒舞渡つた／＼光る君の  
渡つた。夢の浮橋六十帖を渡りつめ十帖と  
詠じた。一に一夜のお情の夕顔の若生え。  
二に匂たきしめて浮舟に蜻蛉。紅梅竹川  
橋姫に手習。我が名ゆかしき東屋でこれさ

まの忍び寝ナホス世も忍ぶ。フシ人目も忍ぶ道  
芝に。駕籠借るすべも白妙の晒布ほすてふ  
横の鳥。はんま千鳥も友を呼ぶ我は伴ふ人  
とても。泣顔かくせ。フシ笠取山。隠すとす  
れど心なや宇治の川霧。絶え／＼にあらは  
れ渡る。網代木の。フシ川瀬の水に。袖ひぢ  
て。互に影を水鏡。やつれさんしたやつれ  
たぞ。はなれ／＼の。あの雲見れば／＼。

明日の別れが思はるゝ。つらき我が身はい  
ろはの文字よく。袖に涙のゑひもせず木  
の葉散りぬる。フシ木幡の里。徒歩でこれ  
程行く事も。初名月や一口堤。づたひの長  
嘸。續く里々山々も。地皆近づきの山なれ  
ど今日の憂き身は心から。さぞ見ぬ顔と袖  
掩ひ袂を掩ひ笠掩ひ。空をおはへば冬の日  
のいと。短く早や暮れて夜は長池の水の  
泡。水の淀みに我もとて淀み。休らひ明さ  
るゝ。

下之巻

地奈良坂や木辻も戀の札所にて。女郎屋揚

屋三十三軒昔の京の八重櫻。九重薫小紫。

女郎を借らんすか。地男の心の二筋に。脇

早う請出し度い。四年の年を三年使ひま

小藤を、の四天王。ッシ續く勢こそなかり  
けれ。地あはれや吾妻は義理合の金の契約  
黙されず。此の里一番名の高き山城屋とい  
ふ。八へ。中年四年二百兩命がらりに身を  
賣りて。大阪の時は明いたれど又傾城と奈  
良晒。縦横沙汰を聞きふれて戀の大和の色  
好み。吉野の花も振捨つる三輪の素麴喰ひ  
付きて。買ふ人餘れど賣る日は足らず中に  
も龍田の藤といふ。しなだれ男纏ひ付き揚  
屋も諸譯吉田屋の。仁三郎を定宿にて二階  
を一間あてがはれ。命ありたけ首尾ありた  
け金ありたけと勤むれば。四天王の名取を  
も。今の吾妻が下に見て。フシ一人武者とぞ  
流行ける。地藤も在所に稀男吾妻に深く染  
めつきの。龍田や沖津白波の習間も連れず  
今日も亦。通ひ木辻の吉田屋の。仁三内  
にか。ヤア妓様達歴々のお寄合。おてき様  
の待合ひ我等が座敷へも。ちと貸して下さ  
れかしと言へば薫小紫。珍しい藤様の外の

へふれぬは側から見ても憎うない物なれど。  
こなさんと吾妻様とはあんまりで小腹が立  
つ。辛氣の湧く程羨しい見ぬがましぢや。  
戀の面々稼ぎしやと。ッシばらく立つてぞ  
入りにける。地仁三郎忙がしけにしよこく  
と立出で。調ヤア藤様いつから此處に御鎖  
座。地手でもお叩きなさいで夢にも白髪  
の母ぢや人。藤様の御出でぢや吾妻様の御  
氣色も。今日はお快ささうな。調申し。醫  
者の名も起縁の物。始は西の京の。道偏と  
申す醫者の薬でどうも變にあつた所を。昨  
日から三條の元者と申す醫者でめつきり元  
氣が見えました。地御祈禱を本服院息災法  
印を頼みませう。銚子々々と手をたたくこ  
れは。吾妻が氣色よいとは頭でよい事  
聞きそめた。調さり乍らあの病氣は。彼の  
江戸屋勝二郎が昔を忘れぬ物思ひ。根引に  
此方へ取つたれば氣が變つて達者になる。  
そこには氣遣ない事。是に付いても一刻も

年の所を元金の二百兩で請出さうといふか  
らは親方も不足ない所。エ、親子の衆が無  
精な。餘所へ取られて此の藤が一分立たず  
死なねばならず。地今日は金をつき付けて  
是非とも詫びて貰ふ思案。耳を揃へて懐中  
したは袖口から手を入れて。調嘘か誠かこ  
れ見や。どれ。ホウホウ。可愛らし  
い小判女郎。是はきつい穿鑿。扱油断とお  
恨みなさるれど。前髪もある私が親程な山  
城屋。算用だても申し悪し母妙慶をやりま  
して。割つつ碎いつ言はせてさらりつと  
埒を明け。地只今お知らせ申さんと硯引寄  
せ遣をすり。鹿の巻筆妻。ひ鹿しかは春日  
の藤様の。果報者め金持め。ッシあやかり者  
めと騒ぎける。地それは大慶先づ吾妻に逢  
ひ度い呼うでたも何處にぞ。調いつもの二  
階にござります。これ林之介。吾妻様呼びま  
しや。地吾妻様太夫様。林之介と呼ばつて  
も返事もせず。是はどちぢや又例の勝二郎

といふ淀鯉を。思ひ出して泣いてかな。鯉がついてゐるさうな鯉なら煎餅蒔いて見よ。いや手拍子を拍つて見よ。心得たんくたんだんたんと手を拍てば。地心浮かねど身の勤め悲しい顔を見せまいと。わざとこくわさわさと二階の口に立つを見て。そりやこそ鯉が現れた盃をさしみにせう。ここへちよくと御入り。ッシ酒うまい事ぢやと喚きける。吾妻二階に腰かけて。これ仁三様。たんと口があがつたの。あんまり鯉々いはんすな。鯉も瀧へ登詰め今ではどうも下りはがない。地總じて鯉といはんすは勝二郎様故かいな。あのさんは八幡の人八幡に鯉はあるまいが。合點がいかにぬと言ひければそれならば今日より。牛蒡様と申さるか。妓様に牛蒡はいか。チャアそれも大事か。加賀の牛蒡といふ事ありそんならいつそう毛牛蒡様。追付け旦那の引拔牛蒡目出たい牛蒡と座を持ってエ。憎い口や叩き牛蒡にし度いぞと。二階下るゝも勇まねど

オクリうはべ。ばかりの笑ひ顔。フシいうて泣くより。なほつらし。地藤もいよく。機嫌よく今日は嬉しい事揃ひ。第一そなたの氣色もよし。仁三親子の働きで身請の埒が明いたぞ。地懐申した金子を里に残いて其の身と。兩替して一兩日に吉日極め。瀧田へお供仕るサア。二階で酒々。吾妻はこれのお袋へよう體いうて跡からおじや。仁三こつちへと手を引いて。フシ奥の。二階へ上りける。地吾妻ははつと怪轉して夢見たやうな事どもやな。根引にするの請出すのと。スエテ取りじめもない。僞上は。地十人が十人で思はれたさに言ふ事。床で帯さへ解かぬ身によもやと思ひ頼みますると僞りしを。先は正直悦んではや談合が極つたか。扱も胸をついた事誰にどうと談合せん。勝様からは便宜もなしサア今でも出るといふ時には。拉き口説いても叶ふまい其の際にならぬ先。とんと打明け言うたらば義理づめに詰められて。思ひ切らるゝ事もあると

階子半分上りしが。同じやくひよつと言ひ出し先に吞込ない時は。勝二郎様のお爲迄取返しのならぬ事。地ア、言ふもいやなり言はねば悪し。罪深い事ながら今の間にあのお人の。身に妨も出来よかし此の病が募れかし。今夜のよるが常闇と明けずにあつてくれよかし。身請の時が延し度いと科なき天にも難をつけ。歎き恨むる世の辛さ。我が身ながらもあさましやとスエテとんと伏して。泣き沈む。フシ涙も。階子を傳ひけり。地通ふ心や格子の前耳にこたゆる諭の聲。一度は榮え。一度は衰ふる。理の誠なりける世の習ひ。住所求むとて東の方に。フシ東の方に。地あづまくとと諭ひ忘れた顔付で。我が名を呼ぶは知つた聲と。行燈の蔭から表を見れば戀しゆかしの勝二郎。飛び立つやうに懐しき表には人目あり。それから廻つてかうくと指で教へて招かれて。小暗をばそつと抜け。つと通れば縄り付きなうよう来て下んした。逢ひ度うてならなん

だとスエテしつかと抱きしめ泣き居たり。地

よい衆の果の流石にて貧苦を貧苦と思は

こそ。此のなりを見てたも。思へば

無算用。そなたの身を賣らす程ならば三

百兩もしてやつて。賣りへぎの百兩も手に

持つたがよい筈。大阪の親方へ二百兩渡さ

ねば。井筒屋の太郎左衛門と約束の義理が

外るゝとて。差も引も無うきつと堅う二百

兩に賣らさいでもだんない事。此の鈍さか

らこのつら。何にも得はなけれども。坂田

藤十郎が夕霧をま一度見たいと思つたが。

此の紙子で手夕霧を仕る。太夫又逢ひに來

たわいの。サアそなたも爰で泣きやといへ

ば。地ア泣くぶんは夕霧に負けはせまい

と泣きければ。男も心惜々と。可愛や。

物真似に。フシ眞の涙を紛らからす。地奥

二階より手を叩き禿衆。吾妻様呼びまし

や。吾妻様。地くと呼ぶ聲すそれ人が來

るア辛氣。どこへがなこれく炬燵へ隠

れさんせと。蒲團をあぐれば勝二郎。同此

夏此處の芝居へ。竹本が弟子が下つて重井

筒を語つた。地サア是から夕霧替つて重井

筒炬燵の段。同北濱邊のよい衆は炬燵に水

を入れます。地紙子一枚の我等はとても

の事に。火炙りになり度いと。フシ蒲團取つ

て引つ被る。地仁三郎二階より障子を明け

て。同申し。吾妻様。只今曆を穿鑿すれ

ば明日は天赦鬼宿日。地萬事揃うた大吉日

金はお身につけてなり。何に不足ない上は

善は急げ明日の朝。目出度う廓を出します

筈。其の用意なされませ飲まうぞく大き

な物で飲んでくりよと。フシ障子引きたて入

りにけり。地炬燵よりむくく起き今のは

何ぞ。廓を出すと善が悪か氣遣な。聞き

度いと氣をせければサアされば。それ故胸

を痛める事。先度の文にも言ふ通り龍田の

藤が事いの。作病起しつ振つて見つ色々飽

かるゝ工面して。退くやうに仕掛けても煩

惱の犬かして。地この妙慶挨拶にて請出

す談合極ると。聞くから胸が騒ぎ出し今に

心が落付かぬ。どうした物であらうやら。

最早智恵にも能はぬと。フシ泣くばかりこそ

力なれ。勝二郎も泣き出し。扱もく悪い

事も。續けば續くものかな。同五年以前に

在所を出で無量の辛さに逢うたれども。諸

めつ慰めつ心で痔を明けたるが。地命かけ

た其方を人の物になす悲しさ。二百兩とい

ふ大敵には。弓鐵砲も敵はぬと。スエテ齒を

くひ。しばり歎きしが。同とかう言ふ間に

夜は更くるもう分別はない所。地其方も死

にや俺も死なうと若い同士は氣を嗜み。死

を先立てて涙をかくす。フシ歎きの色こそ哀

れなれ。地吾妻死に身と胸を据ゑこれ申し

勝二郎様。同死ぬる覺悟に極らば死なすに

通るゝ思案あり。こなさんは先づお歸り内

を仕舞うて。夜半過ぎ八つの時分に又ござ

んせ金調へて置きませう。地其の金持つて

丹波へ退き來年私が年前に。迎に來て下さ

んせ心安うて出らるゝ事。早ういんでござ

んせと呼べば勝二郎それは至極の才覺。同

其の金は借るか貰ふか何處から出るはてそれは構はんすな悪いやうにはしませぬ。地  
早ういんでござんせとせがめば領き悦んで。是ぞほんの丹波越と。不道化言うて忍

び出る。氣の愚かさも育ちからフシ愛き事知らぬ證かや。地吾妻は本の出来心ふつと

言うたは言うたれど、これからが大事の思案炬燵の櫓を談合柱。お腹の痞だくくと

スエテ胸に躍るを擦りさけ。調二階の客を刺殺せば明日の難儀を通るゝ得。金を取れば

勝二郎様のお爲になるが得。地是程よい事あるものか足許によい思案。轉けてあるの

が見えなんだ殺して除けうと思ひ立つ。目の前ばかり背中を知らぬフシ女の智恵こそ

果敢なけれ。フシ夜は何時ぞ。臺所は。夜中を告ぐる躰もあり更け行く儘に怖氣立

ち。膝の頭ふを踏みしめく。階子の口から覗いて見れば。調客は酔うて前後も知ら

ず。仁三郎が浮氣酒いき倒れては性根つかず。地サア仕澄いた階子三つ四つ上つて見

て。調ヤアコリヤ何で殺さう刃物が無い。地帯を解いて絞殺さうか。いやゆるりとする間はあるまい煙草でふすべ殺さうか。酔

うて先へちが死なう何としてよからうぞ。鉄でも剃刀でも金物がなと。座敷中を差足

しフシうろくうろく尋ね廻り。地ヤ思ひ付いたぞ炬燵の火箸。火に焼いて喉吭を

通さば刀も同然と蒲團をあけて手を入れ。熱やくくと懐の。袷紗に持添へ陸奥の。唐紅の錦木や。枝珊瑚樹と焼付けたり。

地嬉しや冷めぬ間にと立上らんとする所へ。仁三郎が母妙慶。調吾妻様まだ起きてかと。

地によろく来れば肝潰し袖の陰に押隠し。調ハアかみ様か。私も早や休みます。冷ぬ間にこな様も。地目のさめぬ間に暖かに。

熱うして寝やしやんせとフシ狼狽へ挨拶跡先なり。地妙慶更に氣も付かずお前は果報

な妓様や。調廓で繁昌しつめて間もなう根引の松さま。千年も万年も藤様との御仲さ

めぬ様に遊ばせ。地其のいとらしいお氣立

ではさめまい。明日お目にかゝりませうと。辭儀を述べて立歸ればフシ火箸は氷と成つてけり。エ、言はれぬ長口上焼直さんと。蒲團あけても炬燵も冷し。エイ調阿呆

らしいなんほう冷めぬと言やつても。炭火までさめ切つたと。地吹いつ煽いづ氣をせ

く所に二階より仁三郎酔さめの長欠伸。客の脇指持ちながら目をすりく階子を下

り。ヤア調吾妻様こゝにか。扱酔ひましたと下に居る。吾妻脇指に心つき。それは藤

様の腰の物。こなさんも先づ氣の通らぬ。客の刃物預るとは渡りなみの客の事。藤様

とは女夫になり明日請出さるゝ今宵となり。心中はせまいし其の儘置いて行かんせ

と。地いへどもふらく居眠りながら。はて一夜でもお客の中は弓矢の禮儀外されぬ

と。いふ内に脇差の柄を膝に押へて。いかう更けたに休まんせと。いへども柄には氣

もつかず明日御見なりませう。鹽茶を呑んで寝てくれうと脇差の。鏢を持つて立つ程

に柄は残れど下は見ず。目は空鞘をぶら下けて。フシふら／＼勝手へ入りにける。地アア／＼有難い神佛のあてがひかと。頂き／＼ひつそばめ立つて見ても後より。又誰ぞ来るやうであぶなさ怖さ右左。足も据らぬ行燈の我が影にびつくりして。わな／＼慄ふ箱階子ぎしぎし／＼鳴る音も。耳にこたへ胸に浸み氣を抑へ息を呑み。漸く惱み上りつき溜息吐いたる女業。我が身ながらも興さむる藤が臥したる北枕。いとしや科もない人をと恐ろしながら背中に腹。胸先に打跨ぎ切先差當てどうと乗る。詞乗られてふつと目を醒ます。これ／＼聲立てまい。此方に恨も罪もない。假にも惚れてくれた人殺し度うはないわいな。地殺さる、此方より殺す我が身が悲しいと。涙は刃に傳ひしがなう生けて置いては請出して。女夫になるか情ない私には大事の男がある。詞其の男と縁切れるが戀路の仇となる故に。地今刺殺す懐の。詞小

判も貧な男に遣り度い。地殺生の罪盗みの罪男の爲に作る心。少しは恨を晴れてたもと又はら／＼と泣きければ。得心やしたりけん敵はじとや思ひけん。目を塞いで返事もせず。サア只今とぐつと刺し。止め迄は手も弱り其の儘捨てて懐の小判を兩の袂に入れ階子下るれば後より。掴み立てたる其の寒さ。寒風肌も縮み胸顫ひ。半死半生の手負伸り反つてうんといふ。聲に驚き階子よりばた／＼とどろ落椽の。ッシ隅に踞んで顫ひ居る。地手負は惱み苦みて。續いて階子を轉び落ち呻く聲に妙慶親子。家内の男女我も／＼と駈出で／＼。詞ハア南無三寶藤様を斬つたは。地斬手があらうと。かしこ草ね探して椽端に。人こそと引出せば是は。是は詞吾妻殿。地それ取放すな縛れ括れと立騒ぐ。詞如何にも斬るも私が斬り金も私が取つたからは。氣遣しやるな逃げはせぬと。地最も器用な白狀。先づく龍田の一門衆兄御の方へ。注進をぬかるなと

ッシ追々人を走らせける。地勝二郎は約束の時分過ぐると紙子に股引。直に丹波の旅出立にて来て聞けば。吾妻が客を斬つたと町のもやつきつと人つて。詞これ／＼亭主身は江戸屋勝二郎といふ吾妻が男。何科なりとも同罪にしてくれと。座敷にどうど坐しければ。地吾妻は泣いて目も明かす無分別な事をして。思ふが仇となりましたと。ッエテ顔を下けてぞ居たりける。詞町の役人龍田より走り歸つて。手負の兄御只今はへ御出でと。地いふを見れば古への手代新七。木綿布子も物さびて御免あれと座敷に入り。主従顔を見合せ互にはつと驚く中。勝二郎赤面しエテ面目なや恥かしや。そちに顔は合されぬと。兩袖を顔に當て。フシうづくま。りてぞ隠れける。地新七恨の兩眼に涙を浮め大聲あげ。詞エ、聞えませぬ旦那殿。我等に顔を隠さるゝは面目ないか恥しい。コレ其の恥しがりが遅かつた。五年以前に新七を恥しいと思召さば。御身代は潰れませぬ。

まつかうあらうと存じた故様々の強意見。新町橋でお足にかけられ踏まれながらも御意見は。地親旦那の御恩の送りたさ。女房お半はお身の上を苦に致し。氣病を煩ひ去年の春遂に空しくなりました。彼奴も元は御家來お主を苦しめて相果つるは。下人たる者の本望聊か悔みも致さばこそ。地親旦那のお蔭で少しの資本家屋敷。在所田の親どもも餓ゑ凍えぬ程なれども。いやくお主は流浪の身。家來の安樂道ならずと家屋敷田地迄賣り代なし。有銀十八貫目御覽の通り我が身にはろくな布子も着ぬ體ながら。地親旦那の十七年忌は内證でお前から遊ばすと申しなし。恐らく江戸屋の追善と笑はぬ程の法事を致し。御出世の願ひのため京都公家方折々の。附届油断もなく。残る金二百兩

いとしや吾妻殿。新町の殘金ゆゑ此の所に勤めと聞き。地御兩人の氣を思ひやり弟の藤五郎が。請出す分で沙汰なしにお二人一所に置きましたらば。貧苦の中のお樂み。高いも卑いも親たる身の悦びといひ子の悦。お前の御機嫌よい顔を。草葉の蔭の親旦那に。見せましたいッ心ざし。御奉公の仕納めと存じ、立つたる所に。

藤五郎は吾妻殿の手にかゝつて死んだか。出来た。此の新七はお主の爲心ざしの奉公はしたれども。一命の奉公は其の方に劣つた。兄に勝つた忠の者。これ。御亭主。只今申す通りに虚言はない。兄が言ひ分ないといふ證文を致すからは別條はあるまい。それとても是非所の作法下手人を取るならば。水入らずに此の新七。地女房は死ぬる親はなし。一人の弟は相果つる雲のうらを尋ねても。お主より外世の中に大事の人は無きものを。隔てて下さる旦那殿恨めしう思ひますとエテどうど伏して。泣きければ。地吾妻を始め亭主親子町内近所の者迄も。誠の心を感じつつ。皆々涙を流しけり。

勝二郎飛んで出で、誤つた。斯様な身と成り果てたもそちを踏んだ下人の罰と。かね々悔み歎いた藤五郎を弟と。知らいで吾妻が殺したも我故ぞ。主ゆゑに身上つぶし其の體となつたを見て。此の勝二郎が如何に畜類なればとて。見ても聞いても居られうか。死ぬるにも死なれもせずとも。情に其の方が。此の足にかけ以前そちを踏んだやうに。勝二郎を踏んでくれ一つの罪も通る。爲。さりとては新七

某を踏んでたもと。足の下に背中を向け、手をあは。せて泣きければ。吾妻は縋つて弟御の敵は私。刺殺して下さるせどうも生きては居にくいと。歎き悔む聲々新七は飛びしさり。ア勿體ない。真加ない新七を新七と思召すが定ならば。御夫婦心を完うして出世を見せて下されば。踏殺されても大事ないと。三人顔を差寄せて。聲をばかりに泣き居たり。かかる處に八幡の神主紀の太夫より。御吉左右の早飛脚。いきり切つて案内すそりや吉左右とは悦ばしと。封目切つ状態開くも疾し過しとて拜見す。なに。江戸屋勝二郎事。家來新七數年の歎を感じ思召され。關白左右の大臣御憤みによつて。八幡の本地もとの如く返し與へらる。

追付け歸宅あるべきと。讀みも終らず八拜九拜悦び躍り飛上り。跳ね上りたる淀鯉の瀧の壺より湧き出づる。白銀黄金の寶。ときは勝間びどき。五畿内五箇國神々に先づ願。ほどきに三喜。悦びの。幣門を上げ神樂をあげ。参り納むる八幡山此の難波津の恵方神民安。全こそ目出たけれ。